



気運



川崎ゆきお

気運というのがある。それは本人の気の問題、心の問題ではなく、具体的に現れる。そうでないと、気運とは言いにくい。

悪い気運に満ちている。これはたまにある。そういう気配というか、空気の中にいるわけではなく、悪いことが重なるのだ。一つだけなら、気にかける必要はないが。

「気運ですか」

「そうだ」

「それは運ですか」

「運がよかったの、あの運に近いねえ」

「それは何処に出るのですか」

「さあ、それはよく分からんが、少し考えれば、そうだったのかと気付く。これは結構神秘的だよ」

「それは偶然でしょ」

「そうなんだが、絵に描いたようなシナリオだ。見事すぎるほどのね。これは神秘事なので、誰にでも当てはまることじゃないけど」

「例えば？」

「具体性に弱い」

「じゃ、やはり気の問題なのですね」

「少しは具体性がある」

「例えば」

「まあ、そう急がないで」

「はい」

「気運というのは天気のようなもので、空模様だよ」

「晴れたり曇ったりですね」

「雨が続き、晴れない日が続く、山あり谷ありの喩えもあるが、何でもいい。長いトンネルでもいい」

「やはり具体例がないのでは」

「気運というか、一変や、一転するきっかけがある。そういうのが一つ二つと続く」

「全部抽象ですよ。具体的じゃありません」

「だから一つか二つ、いいことが続くことがあるんだ」

「いいことですか。具体的には」

「だから、それはただの情報だったりする」

「何の」

「久しぶりに電話がかかってきたりとかね」

「それが具体的な解決に」

「そうじゃない。その友人は大切な友人で、本来私がやろうとしていることのメイン箇所にいる人だ。いわば本道だね。久しく連絡していなかったのは、本道から逸れていたか、または本道を忘れていたためだ」

「少しは具体的です」

「しかし、それらの具体例は、私にしか分からないので、あまり説得力がない。その友人との関係や、その友人と何をしてきたかまで説明しないと理解はほど遠い。だから、私は敢えて具体的に言わないようにしているだけなんだ」

「はい、先を」

「その前に、転んで怪我をしてね。これがなかなか痛みが取れない。ところが、それがましになりだした。回復の兆しがあった。昨日よりも痛くないんだ。それと、友からの電話。それまで、何か悪魔の世界にいたような気になったよ」

「悪魔の世界ですか。それは具体的というか、あり得ないというか」

「要するに、小さな、一つか二つ。三つか四つほど、今までとは違うタイプのできごとが続いたんだ。それらは全て、いい気運だ」

「それは、もの凄く主観的で、気分的なものじゃないのですか」

「それを言ってるんだよ。さっきから、気分だよ。気分が変わったのだよ」

「じゃ、気運が変わったのではなく、気分が変わったのだと」

「そうだ」

「そんなのよくあることでしょ」

「そうか」

「そうですよ」

「それでは私は何の話をしていただけになるんだ」

「よくある話をしていただけですよ」

「何でもいいが、それで光が射したような気になった」

「いいことじゃないですか」

「方角や、本来そうあるべき道に戻れたような気がした」

「いいことですよ」

「だから、気がした」

「え」

「気がしただけ」

「はあ？」

「まあ、それ以上の具体的な何かがあったわけじゃないから、事態はそれほど変わらないがね。

ただ、何となく安心した」

「じゃ、安心して、行動できると」

「いや、安心しただけで、もう十分」

「それは気の持ち方を少し立て直しただけのことじゃ」

「そうなんだよね」

「やはり行動しないと」

「そうなんだけどねえ。まあ、目標があるだけでもいいよ。別にしなくても。ないよりは安定する」

いい気運に恵まれても、動かない人もいるようだ。

了